

主体的な学習者を育てる

11/7に豊中14中の公開研に行ってきました。テーマは「自己調整のある学習」でした。自己調整学習は自由進度ともまた違う。何を「自己調整」するのか、を考える機会になりました。関西大学の黒上晴夫教授（昨年、北小公開研でご講演されていた先生で、本校に来てくださっている泰山先生と一緒に研究もされておられます。）の講演内容を共有します。

『主体的な学習者』を育てる授業

冒頭、黒上先生は、現在の授業が抱える構造的な問題点に警鐘を鳴らしておられました。たとえば、**教師が膨大な時間をかけて準備し、歴史的背景や文脈を熱心に語る一方で、生徒は配布された「虫食いプリント」の（ ）を埋めることに終始してしまう。教師が懸命に語る豊かな周辺情報は聞き流され、生徒はキーワードを書き写すと思いを停止させ、ただテスト前の暗記に備えるだけになってしまう。**これでは、いくら教師が情熱を注いでも、**生徒には「うわべだけの学力」しか身につかないのではないか、**と鋭く指摘されていました。

このような現状を乗り越えるためには、単なる知識の伝達や暗記を中心とした授業から、生徒自身が主体となって思考し、対話し、学びを深めていく授業へと転換することが不可欠です。では、そのために私たちは何を理解し、どのように授業をデザインしていけばよいのでしょうか。

自己調整学習で「調整する」のは

「課題・方法・時間・場所・仲間」だけではない。

黒上先生は、私たちが自己調整学習をあまりに表層的に捉えてしまっている現状に異を唱え、「何を」調整するのかと問われました。従来の自己調整学習の実践は、「いつ、誰と、どこで学ぶか」といった学習環境や時間管理など、いわば「**学習のやり方**」の調整に焦点が当たりがちでした。もちろんそれらも重要ですが、教科の内容そのものから乖離し、メタ認知活動が自己目的化してしまう危険性を孕んでいます。

本当に大切なのは、学習内容そのものといかに対峙し、自分にとって最適な「わかる」という感覚を掴むかを、生徒自身が調整していくプロセスであって、自分にとって最適な「わかる」方法を見つけることだということです。例えば、分数の割り算で「なぜ逆数かけるのか」を説明する場面を考えてみてください。あなたなら、どう説明しますか。「やり方」ではなく、「どうして逆数かけるのか」を。複数のモデルを試す中で、**自分にとって最も納得感のある説明方法を見つけ出していく。**この活動こそ、生徒が教科内容に深くコミットした、本質的な自己調整学習と言えるのです。

学習の「やり方」だけでなく、学習内容への「理解の仕方」そのものを生徒自身が調整していくことこそが、真の主体性を育む鍵となります。そして、このプロセスは一人で完結するものではなく、他者との関わりの中でさらに豊かなものへと発展していきます。

学ぶ喜び

2025.11.9
VOL.16

黒上先生の講演資料



一仲間とともにつながる学校へー

主体的な学び

生徒エージェンシー

学習者が何をどのように学ぶかを自ら決定する「決定者」となり自らの学びをドライブする「調整者」となること

探究と
アクティブラーニング

課題設定から情報収集、整理・分析、まとめ・表現まで一連の知的活動のすべてを生徒が担うプロセス

主体的・対話的で深い学び

個々の知識を構造化し、概念へと昇華させる表面的な知識習得に留まらない学びの質の保証

本質的な授業改革

活動が目的化せず、教科の本質に迫る生徒の思考を中心に据えた授業デザイン

自己調整力

学習者が、何をどのように学ぶかを自ら決定し、そのプロセスを調整していく力のこと。生徒エージェンシーは生徒が学習における「決定者」になることを意味し、自己調整学習は自らの学びをドライブしていく「調整者」となることをさします。これらは、生徒が受け身の学習から脱却するための基盤となる考え方です。

探究とアクティブラーニング

生徒が主体となる学びを具現化するプロセス。探究学習では、「課題設定」から「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」まで、一連の知的活動のすべてを生徒が担います。また、アクティブラーニングは、知識を受け取るだけの受動的な学びから、**自らの頭（※表面上の体の動き・グループ活動ではない）を活性化させ、能動的に関わる学びへの転換**を意味します。ここでの主役もまた、言うまでもなく学習者自身です。

主体的・対話的で深い学び

文部科学省が学習指導要領で示すこの理念の本質は、表面的な知識習得に留まらない学びの質を保証することにあります。特に「深い学び」について、黒上先生は「なぜ鎌倉に幕府ができたのか」という問いを例に挙げられました。年号を暗記するだけではこの問いには答えられません。当時の社会情勢、地理的条件、海外との関係といった多様な情報を結びつけ、個々の知識を構造化し、概念へと昇華させること、それこそが「深い学び」なのだと。

私たちがめざすべきは、授業の中心的な活動を「**生徒が自分の考えを作り、それを他者に説明すること**」にシフトしていくことです。近年の全国学力調査のデータは、「どのように考えたのかについて説明する」活動に取り組んでいる生徒ほど、教科の正答率も高い傾向にあることを示しています。つまり、自分の考えを説明する活動は、深い学びを促すだけでなく、結果的に知識の定着や応用力といった基礎学力の向上にも繋がる、非常に効果的なアプローチといえそうです。

まずは、明日の授業の一場面で、**生徒が「自分の理解を自分の言葉で説明する場面」**を一つでも取り入れてみてはいかがでしょうか。その小さな一歩が、生徒を真の学習の主体者へと押し上げる、大きな変化の始まりとなるはずです。